

3 遠へ  
2377 稀

石餘真 腹筋逢夢  
坐敷 忠藏  
藝 臣  
繪入讀本  
全一冊

山東京傳戲作

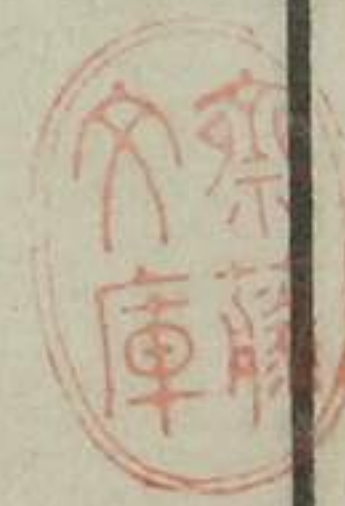
龜堂

文龜堂梓行

歌川豐國戲画

坐敷藝忠臣藏序

寒中の皚皚吹雪の中の河豚汁とまきでん乃事と。  
称養せし冬籠。戲作の新版。はらんよん。と金屏の  
松の古枝をきつて。囲炉裏よん。と。ちんてんてん。と。名をたんと。れてと。  
麥つき歌乃。麥茶をとて。安行燈のわろをてりして。  
此長の夜をまじくと。起て居ても。あつね眼鏡や。扇など。  
夜目がきく。子ば自笑。とおがら。おりのひつくる。讀本。よん。  
八文字屋のそとくも。ゆき。一文字屋の智慧。も。で。ゆき。



Handwritten text at the top of the left page, likely a title or chapter heading.



合成 隨火  
風 一曲 勾  
欄 曲 終テ 後。  
本 然 大 地  
忽 為 空  
河 豚 小  
其 角 白

Handwritten text at the bottom of the left page.

Handwritten text at the top of the right page, likely a title or chapter heading.



抽 牽 者  
即 主 人  
公 地 水  
之 木 舞  
皆 偶 畢

Handwritten text at the bottom of the right page.

ころつてい思案<sup>あかん</sup>よわさいどと。烟草<sup>たばこ</sup>でうかく考<sup>かんが</sup>て。獅子<sup>しし</sup>  
 鋤石<sup>あしし</sup>の烟管<sup>まきさる</sup>の火皿<sup>ひざら</sup>とけるむらうで趣向<sup>きゆうきゆう</sup>いうぬど。わんど  
 案<sup>あん</sup>トふ月<sup>つき</sup>の入山<sup>いりやま</sup>をかより一里半息<sup>いちりはんいき</sup>ときらる力<sup>ちから</sup>跡<sup>あと</sup>のどく。  
 文箱<sup>ぶんばこ</sup>りてて版元<sup>はんげん</sup>の催促<sup>さいそく</sup>い毎日<sup>まいにち</sup>あり。そふで虚<sup>うつそ</sup>りし出<sup>で</sup>  
 實<sup>まこと</sup>でまくれを根<sup>ね</sup>いとげまいと明日<sup>あした</sup>のむらうてといひのづる。一寸<sup>いっせん</sup>  
 のれの方<sup>まへ</sup>八<sup>はち</sup>をまや伊賀屋<sup>いがや</sup>氣<sup>き</sup>の長<sup>なが</sup>い版元<sup>はんげん</sup>も。勘右衛門<sup>かんゑもん</sup>袋<sup>ぶくろ</sup>の  
 緒<sup>いと</sup>がきれて。自身<sup>おんみづか</sup>よ馬<sup>うま</sup>を糸<sup>いと</sup>出<sup>で</sup>し。節季<sup>せつき</sup>師走<sup>しそ</sup>の賣物<sup>うりもの</sup>ハ  
 一日<sup>いちにち</sup>ちぐべれこづらふと。理屈<sup>りくつ</sup>の詞<sup>ことば</sup>づるふか。えむめやまり

入<sup>いり</sup>まーこと。地口<sup>ぢぐち</sup>でもあく作<sup>さ</sup>でもあく。あやうしほし又<sup>また</sup>書<sup>か</sup>綴<sup>ずい</sup>  
 種本<sup>しゆほん</sup>それへおろしやと。自身<sup>おんみづか</sup>よ氣<sup>き</sup>とつけ校合<sup>きやうがひ</sup>われと  
 めのゆれど。版元<sup>はんげん</sup>いゆとく。からてんかてん。全部<sup>ぜんぶ</sup>上木<sup>じやうぎ</sup>とる  
 までの衣<sup>え</sup>奠<sup>めい</sup>ふも喰<sup>く</sup>さぬ。此種本<sup>こししゆほん</sup>と懐<sup>なつか</sup>ふしと飯<sup>い</sup>りり。かる  
 手誥<sup>てご</sup>の作<sup>さ</sup>られを。ゆめんゆへたひく

山東京傳戲誌



文化七年庚午春待月





二段目

このおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男

いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男



乃井  
おりの

▲おれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男

いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男

ちかちかとさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男

いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男



おの  
たまた

いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男  
いふおれはさういふ男







三段目切

不忠のめいせとあやまんがんやんどうろろがやぐりゆ  
ていふころのころあふよひちけあふり乃わんどうり  
あふりゆそのめいせあわよふりかまかんとうそ  
まかんがんてあやまんどうろろがやぐりゆ

「いんた  
えき乃  
うんやんあやまん  
まんがん乃あやまん



あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん

あやまん  
あやまん  
あやまん



あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん



「あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん

あやまん  
あやまん  
あやまん

あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん



あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん  
あやまん

あやまん

四段目



せみの  
おのり  
あんな  
まげの  
おどろ  
又十せん  
とのかん  
されたる  
おんざ  
おむと  
山某地  
みどりこ  
みどりこ

おんざ  
あんな  
まげの  
おどろ  
又十せん  
とのかん  
されたる  
おんざ  
おむと  
山某地  
みどりこ  
みどりこ



おんざ  
あんな  
まげの  
おどろ  
又十せん  
とのかん  
されたる  
おんざ  
おむと  
山某地  
みどりこ  
みどりこ

おんざ  
あんな  
まげの  
おどろ  
又十せん  
とのかん  
されたる  
おんざ  
おむと  
山某地  
みどりこ  
みどりこ

四段目切

おちりまうける諸士のりあがりやふんぬればいびくせいで  
 こそさんとしらぬをめておちりの助いびくせいでいびく  
 これへおちりまうける諸士のりあがりやふんぬればいびくせいで  
 こそさんとしらぬをめておちりの助いびくせいでいびく

おちりまうける諸士のりあがりやふんぬればいびくせいで  
 こそさんとしらぬをめておちりの助いびくせいでいびく  
 これへおちりまうける諸士のりあがりやふんぬればいびくせいで  
 こそさんとしらぬをめておちりの助いびくせいでいびく



おちりの助  
 おちりまの  
 おちりまの

○腰袋を袴門とあひだ乃  
 ひびくせいでいびくせいでいびくせいでいびく  
 ひびくせいでいびくせいでいびくせいでいびく  
 ひびくせいでいびくせいでいびくせいでいびく

おちりまうける諸士のりあがりやふんぬればいびくせいで  
 こそさんとしらぬをめておちりの助いびくせいでいびく  
 これへおちりまうける諸士のりあがりやふんぬればいびくせいで  
 こそさんとしらぬをめておちりの助いびくせいでいびく



おちりまうける諸士のりあがりやふんぬればいびくせいで  
 こそさんとしらぬをめておちりの助いびくせいでいびく  
 これへおちりまうける諸士のりあがりやふんぬればいびくせいで  
 こそさんとしらぬをめておちりの助いびくせいでいびく

おちりまうける諸士のりあがりやふんぬればいびくせいで  
 こそさんとしらぬをめておちりの助いびくせいでいびく  
 これへおちりまうける諸士のりあがりやふんぬればいびくせいで  
 こそさんとしらぬをめておちりの助いびくせいでいびく



# 五段目

かん平  
あてかり

えん乃かん平のむしあひの事  
むしあひのむしあひのむしあひ  
いふむしあひのむしあひのむしあひ  
むしあひのむしあひのむしあひ  
むしあひのむしあひのむしあひ  
むしあひのむしあひのむしあひ  
むしあひのむしあひのむしあひ  
むしあひのむしあひのむしあひ  
むしあひのむしあひのむしあひ  
むしあひのむしあひのむしあひ



かん平の  
あてかりの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの



あてかりの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの

かん平の  
あてかりの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの

かん平の  
あてかりの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの  
むしあひの















目段九

何ぞやこのやうな者ぞうづつと  
 かちかちしてておけりするなりを  
 自らもくろくしおとじりおびり  
 ひびくやうおとておとておとて  
 中々おとておとておとておとて  
 乃オゾゾとしておとておとて  
 何アまてカキカキとまるか  
 くらかくらかくらかくらか  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり



おとて

カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり

何ぞやこのやうな者ぞうづつと  
 かちかちしてておけりするなりを  
 自らもくろくしおとじりおびり  
 ひびくやうおとておとておとて  
 中々おとておとておとておとて  
 乃オゾゾとしておとておとて  
 何アまてカキカキとまるか  
 くらかくらかくらかくらか  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり



おとて

カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり  
 かしはかきかきかきかき  
 カキカキのやうな  
 せまらておとておとて  
 ひびりひびりひびりひびり









後序

損料乃史記も師走の螢とん。隠者の夜学  
うべなるか。市中の隠の住家ゆゑ雪をつらぬる空地も  
う。螢をわひひる廣庭もあれたを真の油をついで年ごと  
夜もさう。机よひひひ此讀本の稿成てつぐ年乃  
うまぬれり。年浪のまら人の額よよせて半白乃  
霜の頭よおき。け取の腰よ光陰の矢うとらぬをせむ。  
餅花の枝よ月日の嵐うら。往來の音もあつづ

せうく。袴きぬ婚入もわきを。見支よ出立山伏  
もわり。素足の奴の脚をつみ。鴨をうぐさ人薄着乃  
下女の昆布卷のわらね着を羨む。寒垢離乃腹の隅田  
川の樽よひとく。煤掃の頭巾の菓子袋よ塵を  
おろり。つるひ物よ氣とらうて。齒ぎり。髪を  
門よ於の枝をそえて。信心がりの翳り。破魔弓も絳紅  
の鉢巻を。土牛蒡も藁の股引をえきて。いそじ  
びる年の瀬や。ひよめのみ鶴のおりひわれを。一休乃

土器も工面よくて胸箕用書出しをくり返して  
 常の心乃おき所の無分別なる仕業をくらやめや  
 おく露の質くさもあられを。借錢の山高くて大晦日の  
 谷深く。唯やん酒の声上戸は涎をかきしめ。貸餅の音  
 下戸の耳をよらるる。むの。拔足を鳥うも。碁ご  
 しくぬりし隠居さぬも。心の師走はあてかりる。ごと  
 けらる。世話を焼飯は。煮花をかけた腹をはく。寒  
 念佛も。祓ぐに。飯り。漬菜。納豆の声。くさむら

朝まごき。鍛治屋の子ンカウ。米屋の白。世間の夜るハ  
 こらの昼雀のまらふ。節季休も。サツサと。きりぬれや  
 我活業を。とげまを。頃

# 山東京傳再志



備書橋本徳瓶

江戸

山東京傳戲作  
歌川豊國戲画

京傳商店物

讀書丸 一つみみ ○オ一きんとしてくく一 おんをよくとつてりやうん人  
大極上品きり丸 大人小見万病はよ大極のふき  
京傳自画せん わさきせんざんごころを繪乃るいふおくきせうたをい  
京山せん 玉石洞中にての道てい  
京傳店をそ

文化七年庚午冬十二月発行

江戸小舟町二丁目中之橋通

地本問屋 文亀堂 伊賀屋勘右衛門板

文化八年辛未春 新板中本目錄

巻のけと 腹筋逢夢石 初編 中本 山東京傳作 画

同 逢夢石 二編 中本 山東京傳作 画

同 逢夢石 三編 中本 山東京傳作 画

十二支之技 腹佳話 鷓鴣藝初編 中本 山東京傳作 画

世帯道具 鷓鴣藝臺所譚二編 中本 山東京傳作 画

同 鷓鴣八藝臺所譚 三編 中本 山東京傳作 画

餘 逢夢石 座敷藝 忠臣藏前後 中本 山東京傳作 画

右のつと 地本問屋 小舟町二丁目中之橋通 文亀堂 伊賀屋勘右衛門板

